



時代に左右されない焼物を表現していきたい

後関裕士

備前焼を代表する若手作家として確実な技術で精巧な作品を手がける後関さん。茶陶をイメージする方が多いとは思いますが、後関さんが手がける器からも目が離せません。備前の伝統イメージを保ちながらお茶碗でみられる高級感がそのまま見事に器にも映し出され、提供する料理に高級感を与えます。

後関さんのブレない考えや今後の展望をたっぷりとお伺いしました。後関先生の素顔も垣間見れたインタビューとなっております。ぜひお楽しみください。

常陸大宮の工房にて

伊勢崎先生との出会いや、弟子時代のエピソードを教えてください。

東北芸工大時代にお世話になった評論家の先生が伊勢崎先生と仲が良く、ちょうど”伊勢崎先生のお弟子さんが一人卒業するらしし、あなた行ってきたら？”と言われ紹介していただけたのがきっかけです。先生は口うるさく教えてくれる方ではなかったので、自分でアンテナを張って自ら色々吸収することが大切な環境だったように思います。工作中よりは、先生をどこかにお連れする時の軽トラックでの会話が印象的でした。戦後で誰も食べていけなかった時代での陶芸の話などはとても面白かったです。淳先生の駆け出しで苦労された時代のお話などを聞くのはとても面白かったですね。

備前を選んだのはどうしてですか？

僕は大学時代、野焼きにすごく興味があって、縄文土器など昔から変わらずに人を惹きつける、質感や形に興味があったんです。それを大学の先生が知っていたこともあり伊勢崎先生を紹介して頂けたんです。もちろん新しいことをされている作家さんも出てきていますが、備前は昔から同じ素材と技法で作られているので、”焼物”を勉強するにはここしかないなと思ったんです。今後それをやり続けるかは別として、備前で焼物の歴史を学べると思い悩むことなく伊勢崎先生の元への弟子入りを決めました。

作品のインスピレーションはどこから来るのですか？

作りながら形を叩いていくうちに決めていくことが多いですね。叩きながら変形していく形を見て、ここは残す、ここは無くすなどとして制作しています。一から作るというよりかは、元からできている形から自分がいいと思う形に調整していく感じですね。お茶碗って作る人の全てが出てしまうと思っているんです。その人が何を美しいと思っているかの感覚が出てしまうので。自画像的な感覚ですね。

作品を通して伝えたいことは

僕は人の為に使っているという訳ではないので、自分の中で美しいと思うフォルムや材質を自分の思うように作っています。それを喜んでくれる人がいるって凄くありがたい事ですよ。なのでこれからも”今の時代はこれが売れるから”という理由でやってしまうのではなく時代に左右されないような焼物を表現していけたらと思っています。今の時代は加飾の表現の面白さがピックアップされがちですが、それに流されたいいけないだろうなと思っています。だから僕が持つアンテナを同じように理解して楽しんでくれる人に向けてしっかりした仕事をできたらと思っています。僕の焼物はみんなが理解してくれるシリーズものではないと思っているので。芸工大時代の友人でも加飾で注目されている作家がいま

すが、彼らは時代への反応がしっかりできていて、今の時代に求められているもの且つ自分の中でもやりたいことをしっかりと合致させ表現してキャリアを築いているので、僕もそっちに行きたいな、派手な色とか金箔を使えたらなっと思ってしまう時もあります。でもそれを僕がやったら自分がやる意味がなくなってしまうので、時代に流されない作品を作り続けたいですね。

製造方法について教えてください。

僕の窯は完成して4年くらいになります。備前の作家としてはかなり小さいものを使っていますね。昔の作家さんは備前人気で作品がすごく売れていた時代なので大きな窯を持っている人が多かったんですが、大きい窯を使うとどうしても製品ぽくなってしまうのでアート性を求めるなら小さい窯の方が向いていますね。益子の作家は僕くらいのサイズを持っている人が多いです。僕が他の備前作家と大きく違うところは、益子や笠間の近隣でやっていることももちろんですが、使う薪が違うことです。備前でよく使われる赤松がこっちは簡単に手に入らないので、樫や栗、梅などいろんな薪を使っていることです。初めは仕方なく使っていましたが今はそうする事で色々な色味が出るのであえてそうするようにしています。今は逆に赤松が手に入らなくなってしまったのでそこまで興味はなくなってきました。最近この木を使えばこの色が出ると分かっていたはずなのですが、前はそれを過信してしまって大きな失敗をしたんです。そんな簡単じゃないんだなっと思いましたね(笑)

焼成時間は1週間くらいで、1200度弱をメインにして最後の数時間だけ窯内の様子を気にしながら温度をさらにあげ1300度くらいまで温度をあげます。備前の土は信楽の土のように、いくらでも高温に耐えられるものでないのでものを見ながら調整をしています。土はほとんどは備前の土で釉薬を使う作品は益子の土と使い分けています。益子を使う時は、窯を作った時の土を表情を出すために少し混ぜたりもしていますね。

また今までは基本手捻りでしたが、最近は轆轤を使う作品もあります。轆轤を使うことによって、手捻りが更に良くなるんじゃないかって思うことがあったので、怠けちゃいけないんだなって思います(笑)

後関さんの蒼変黒について教えてください。

蒼変黒はいわゆる黒備前を参考にしたもので、化粧土をかけて昔の黒備前の引用を現在の原料を使っておこなっています。ただ現在の原料に少しコバルトも入っているのでそれで青が強く出ているのかもしれませんが、元々は先生の黒備前を参考に僕もそれを伝承してやっていたんですが、薪や窯の違いでより強い青が出るようになっています。

今後挑戦したいことはありますか？

今までは茶碗を好きで作ってきて、幸いにもそればかりをやらせて頂ける機会を頂けてきたのですが、僕としては茶碗ばかりを作る作家の茶碗より、他の作品も手がける作家が作るお茶碗の方が魅力的なんじゃないかって思うようになりました。例えばずっと彫刻作品しか手掛けていなかった作家が作るお茶碗てまた別の魅力があるじゃないですか。それにお茶碗ばかりを作っていると想定内の中でその仕事を磨いていくことになると思うんです。もちろん、それもとても大切なことなのですが、ただ僕としてはその”想定”を覆していきたいんです。ずっとお茶碗だけを作っていると想定の外に出るのが難しくなってくるんだらうなと思うんです。僕も、もし一つの作品しか作らなければ根詰まりしてしまう気がするんですよね。

だからそういう意味で大きい作品の仕事、大壺とかオブジェ的思考の作品とか、土の塊のようなものを作ってみたいなと思っています。淳先生も流行りに振り回されない形で今は造形作品を生き甲斐とされているので僕もあんな形で大きい仕事もできたらなと思っています。その中で茶陶も作ることができたら、両方の作品から学ぶことがあってまたステップアップできるんじゃないかなと思いますね。

文章：山根由貴